

■ 近頃思うこと

小林 和 夫*



若者の人口は10年前に比べて7割以下に減少し、大学全入時代、さらには大学の倒産ということも現実化している。個々には差があるものの、最近の一般的傾向として理工系学部では学生数が減り、理科や数学の学力低下が顕在化している。このため、入学当初の導入教育を含めた授業内容や指導法の大幅な見直しが必要になっている。コンクリート関係の授業を通して多くの学生と接している者として、理数系の基礎学力を身につけて、一人でも多くの若者が「コンクリート」に興味を抱いて巣立ってほしいと切望し、日々全力投球している。

最近、新たな気持ちで21世紀間近のFIP（1998年にCEBと合併しfibとして発足）のコンgresやシンポジウムでのPCの将来にかかわる基調講演を読み直してみた。それらを私なりに整理すると、1) 今後の目指すべき方向は経済性、維持管理、防災、環境保全などの公的ニーズに寄与すること、2) そのための研究開発、規準、教育がとくに重要であることに要約されよう。2) のおのおのの重要項目として、たとえば、「研究開発」では現場実務や現場実験・計測などによる知見は基礎研究の補完に非常に有効であること、「規準」では第一線の技術者が積み重ねてきた技術的経験を踏まえて入念に原案を策定し、十分な審議を経て普遍的に容認されたもの（本協会では「PC技術規準委員会」を常設し、広範な調査・研究の成果に基づき、PCの持続的な発展に欠かせない課題ごとに規準の発刊・発信を進めており、この面から高く評価できる）、「教育」ではとくに若手技術者にマニュアルの範囲外の問題への対応にも有用な生きた情報を伝達すること、などが挙げられている。

ところで、今後、わが国は少子高齢化社会に向かうため建設分野に求められる内容もかなり変化していくものと思われる。加えて、国や地方の財

政が厳しく、公共事業費の縮減と維持管理事業の拡大という大きな流れがあり、コストダウン、性能設計や許容リスクなどの幅広い観点から構造物のライフサイクルコストを合理的に取り扱い、最小化したいというニーズがますます強くなるであろう。

また、地理的、地形的、気象的に厳しい自然条件下にあり、地震や台風、豪雨などが発生しやすいわが国では、これらに備えた国づくりが喫緊の課題である。このような自然災害に対する「防災」とともに、「環境保全」という2つの大きな課題を全面的に担えるのは建設分野において無いと思われる。今後、ハードとソフトの両面において高い水準を誇るわが国の建設技術を最大限に活用し、これらの両課題に取り組んでいかねばならない。

「PC構造の原点フレシネー」（J.A.FERNANDEZ ORDOÑEZ 著、池田尚治 監訳、建設図書 発行）の序文に、“フレシネーと共に、コンクリートは飛躍し、質量が大きいという根本的な欠点は克服され、そして質が量に取って代わった”と記されている。このような革命的なPC技術がわが国に登場してから50年以上が経過し、研究開発や普及に向けた多くの人達の情熱と献身的な努力によってきわめて著しい発展を遂げてきた。プレストレッシングは、まさに起死回生の満塁ホームランともいえるべく、難しい多くの課題を見事に解決してきた。このことは、国内外における多くの事例から明確に示されている。

英知を結集したPC構造物の事例を通して、人間生活の質の向上に寄与していることを社会に理解してもらうよう努めることは、PCのさらなる発展に向けて非常に大切なことである。

さまざまな形でPC技術に関与しているわれわれは大変幸せであり、このことを誇りとして、さらに努力を重ねて前進したいものである。

* Kazuo KOBAYASHI：本協会理事 大阪工業大学 工学部 都市デザイン工学科 教授